

1 つの実体・概念にただ1つの名前をつけることを、私は「一物一名の原則」と名付けて、研究室で若い研究者や学生に指導してきた。より詳しくは、1つのドキュメントあるいはプレゼンテーションにおいて、1つの実体・概念を複数の名前で指してはいけなし、1つの名前で複数の実体・概念を指してはいけない。このこと自体は当たり前で、だれでも原則としては知っているであろうが、実際には往々にして誤りがちである。特に上位概念と下位概念を同じ名前で指してしまうことがある。このような場合、書いているあるいは話している本人は、無意識に切り替えているので原則から外れていることに気がつかないでいる。一方、読んでいるあるいは聞いている方は一物一名の原則が守られていると無意識に信じているので、混乱して理解が進まないことがある。原則が崩れているかもしれないと気づけばそれなりに理解できるが、非常に疲れる。聡明な、あるいはその分野に非常に詳しい人は、瞬時に気がついて理解できるかもしれない。

異なる著者のドキュメントにおいては、同じ実体・概念を別の名前で指していることはあるし、概念が若干ずれていることもある。このため、複数のドキュメントを読んで、自分のドキュメントを作成するときに、よく理解していないと、複数の著者が使用している名前(用語)が混ざってしまい、一物一名の原則が崩れがちとなる。特に、複数のドキュメントのコピペを寄せ集めた学生のレポートは一物一名の原則が大崩れで、読むのに非常に疲れる。内容をよく理解して、自分の言葉で再構築したレポートは楽に理解できる。また、本会論文誌への投稿原稿を査読させていただいたこともあるが、残念なことに一物一名の原則が崩れていると思われる原稿もしばしばあった。

若い研究者や学生への指導の中で、「一物一名の非

速水治夫 Haruo HAYAMI

神奈川工科大学情報メディア学科

[正会員] hayami@ic.kanagawa-it.ac.jp

1972年名古屋大学大学院修士課程修了、同年、電電公社入社。NTT研究所において大型コンピュータDIPS、データベースプロセッサRINDA、インターワークフローシステムの研究開発に従事。現在、神奈川工科大学においてデータベース、グループウェア、Webアプリケーションの研究・教育に従事、教授、評議員、博士(工学)。本会フェロー。

共有状態」も理解させないといけないことに気がついた。プレゼンテーションに対する質問者の用語は、発表者の用語と異なった意味で使用されているかもしれないということである。このことに気がつかないと質疑が収束しなくなる。卒業研究発表会で専門分野の異なる先生が会場におられるとよく発生している。発表者の方が内容やその分野に詳しいのであるから、質問者の用語とプレゼンテーション中の用語のずれを理解しつつ回答しないといけないと指導している。このことは私自身が学会の場で経験したことでもあり、大学で役職者として理事会でのプレゼンテーションと質疑でも強く感じた次第である。

基
般

[シニアコラム]

IT好き放題



[No.60]

一物一名

私の大学の卒業生の多くはSE(システムエンジニア)を目指している。彼らにも上述したことは非常に重要であると指導している。SEはクライアントの要望を聞き、仕様書にまとめ、自社や発注先のプログラマに提示してシステムを完成する。仕様書の執筆においては、一物一名の原則を徹底しなければ、仕様書のレビューやプログラミングにおいて混乱が生じる。また、クライアントからのヒアリングにおいて、当初は用語の非共有があるのは当然で、この克服から始めなければならない。

私は前職において、多数の仕様書を書いた。開発費が10桁に及ぶようなコンピュータの仕様書にかかわったこともある。仕様書の作成時には開発社の技術者方とレビューを繰り返しながら完成させるので、仕様書の記述において一物一名は達成されたと思う。しかし、開発物の検査の段階になって、用語の非共有があったことに気がつくこともあった。これらの経験をもとに学生たちを指導してきた。この記事の内容はベテランの方々には釈迦に説法であろう、学生会員を中心とした若い会員の参考になれば幸いである。

この記事において一物一名となっているか心配しながら筆を擱く……。

(2015年9月23日受付)